第一場面　八組のまとめ

客は、ちょうを見たことで、少年時代にあったちょうにまつわる苦い思い出を思い出してしまった。その思い出を話すのは恥ずかしいため、ランプにかさを載せて、互いの表情が分からないようにしてから話を始めた。

大野晃季

客は「わたし」と話しているとき、たまたまちょうのことになり、嫌な思い出を思い出してしまい、「わたし」に悪い態度を取ってしまった。だから、お詫びのついでにランプにかさをつけて部屋を暗くして、話すのが恥ずかしくないようにしてから、窓の縁に腰かけ、話を始めた。

古川大樹

客は、ちょうを見ると幼いときの思い出を思い出し、ランプを少し暗くして、自分の顔が見えないようにしてから、話を始めた。

山下桃加

客は「わたし」のちょうを見て名を言っていたが、途中で良くない思い出を思い出してしまい、「結構」と断り、ランプにかさをして部屋を暗くして、自分の顔の表情の見えない窓際に行き、その思い出を「わたし」に語り始めた。

梅田旬太郎

客は「わたし」のちょうを見せてもらい、あまり良くない思い出だが、またちょうを集め出したという「わたし」には話そうとした。彼はランプにかさをつけ、少し暗くして、気持ちを落ち着かせてから、話し始めた。

赤座利菜

客はちょうを見せてもらい、幼いころの嫌な思い出を思い出してしまい、「もう、結構」と言ったが、反省をして、ランプにかさを載せて、自分の表情が見えないようにして、話を始めた。

村瀬紗弥

客は、昔やっていたちょう集めを思い出して、昔の嫌なことなどや、子どもの時はちょうは好きだったけど、大人になって嫌いになり、昔の思い出を言うために、ランプに火屋をつけて顔を見せないようにして、話を始めた。

加藤千晶

客は、ちょうにまつわる思い出を思い出して、「もう、結構」と言ってしまった。お詫びに、かさをランプにつけ、恐ろしい雰囲気の中で話を始めた。

田中裕瑛

客は、ちょうに関する嫌な思い出を思い出すと、ランプで自分を見えなくし、その嫌な思い出の話を始めた。

足立彩音

客は「わたし」のちょうを見て、自分で汚した幼年時代の思い出がよみがえり、その思い出を「わたし」に話そうと、顔を隠すためにランプにかさを載せ、そこから離れたところに腰かけ、思い出の話を始めた。

国枝まり

客は、「わたし」と一緒にちょうを眺めていた。不意に彼は珍しいフルミネアを取り、なぜか羽の裏側を見て、そっと元の位置に戻した。不愉快そうだ。すると彼は、そんな態度を取ったお詫びのように、ランプにかさを載せ、昔の思い出を語り始めた。

髙橋みなみ

客は、「わたし」にちょうを見せてほしいと言った。しかし、見ていると嫌な思い出を思い出したように「もう、結構」と言った。彼は悲しい話をしようとしているので、ランプにかさをし、顔を見せないようにして話す環境を作り、話し始めた。

横山あさ実